HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	方法論的プラグマティズム・多元主義・環境倫理学
Author(s)	Wright, Anddrew
Citation	応用倫理, 1, 71-82
Issue Date	2009-03
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.1.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51743
Type	departmental bulletin paper
File Information	06_wright_oyorinri_no1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

方法論的プラグマティズム・多元主義・環境倫理学

アンドリュー・ライト（ジョージメイソン大学）著
斉藤健（北海道大学）訳

私は 1992 年に、「環境プラグマティズム（environmental pragmatism）」（Light 1993）と呼ばれる、環境倫理学における多元主義的立場（pluralist position）を展開し始めた。私の試みは、象牙の塔を囲む壁の外に出て、ほとんど読まれることのない哲学研究誌を越えて、公共的領域の中に入っていくために、なぜ環境倫理学がよりプラグマティックな仕方で行われねばならないのかを擁護する標準的な議論を提示することであった。環境倫理学は公共的領域では、いかにして世界を改変し、世界に対する我々の関係を変更するのかに関する、活気に満ちた対話に貢献しうるのである[1]。

この議論は部分的には、環境倫理学は分野として環境問題の解決に対してなしうる貢献をしていないし、環境史や環境社会学といった他の学問分野のように多大な効果をあげているような貢献をなしていないと感じている人もいるという不満に対する反応であった。例を二つ挙げよう。1980 年代後半から 1990 年代前半にかけての環境論争と環境運動について、ウィリアム・クロノン（William Cronon）（歴史家）とロバート・ブラード（Robert Bullard）（社会学者）の多大な影響を考察してみる。クロノンの論文「原生自然の問題（The Trouble with Wilderness）」（1995 年）は、米国の国立公園および、1988 年のイエローストーン大火の後を受けての原生自然管理の将来をめぐる論争を形成するのに非常に決定的であった。『アメリカ南部諸州の投棄問題（*Dumping in Dixie*）』（1990）から始まるブラードの一連の研究は、初期の環境正義運動（environmental justice movement）を記述しただけではなく、結果として、米国大統領ビル・クリントンの 1994 年 2 月大統領令の発布に積極的に貢献した。この大統領令は、少数民族と低所得者の住民に対する環境政策の効果を考慮することを命じたものである。現在、真に才能のある人々が環境倫理学の分野で研究しているが、一般社会において、少なくとも米国では、上記の例に匹敵する成果を我々は示せていないと思う[2]。

この環境倫理学者と他の環境専門家との成果の格差は、哲学一般の本質あるいは特にこの分野の哲学の本質に関して何かを反映しているのだろうか。環境倫理学者がある特定の事柄

---

[1] 同時に、プラグマティストの考えを環境哲学（environmental philosophy）に注入することを記述するために、「環境プラグマティズム」という用語を他の誰も使用していなかった。しかしブライアン・ノートン（Bryan Norton）のような人物は自分たちの見解を「広義にプラグマティック（broadly pragmatic）」（Norton 1991, x）であると記述していたし、アンソニー・ウェストン（Anthony Weston）のような人物はジョン・デューイ（John Dewey）のような典型的なプラグマティストの思想を環境倫理学へ注入した役割を記述していた（Weston 1985）。1996 年までにエリック・カッツ（Eric Katz）と私は、彼らおよびその他の人々の研究を集めて、『環境プラグマティズム（*Environmental Pragmatism*）』という表題の著作を編集し、この分野で発生している思想上の学派のようなものを大々的に取り上げた。

[2] 恣意的な区別だと思う人がいるかもしれないが、我々は、動物の福祉と農業倫理を研究している人々による規制機構と擁護団体への比較的多大なレベルの影響を指摘できる。ピーター・シンガー（Peter Singer）、トム・リーガン（Tom Regan）、バーナード・ローリン（Bernard Rollin）、ポール・トンプソン（Paul Thompson）の研究は特に傑出している。しかしながら、注意しなければならないのは、これらの分野を研究している人々は一般には、多くの環境倫理学者と同じ出発点から研究しているわけではない、ということだ。

に執着していることに関係しているというのが私の見解である。その執着は、哲学研究一般で広く見られる傾向によって部分的には影響を受けてきたかもしれないものである。どのようにして環境倫理学が今日のようになったのかという説明に関係なく、興味深く、教育と探求に価値のあるような、純粋に理論的な環境問題は多い。だがもし、結局のところ、少なくともこの分野で研究している人々が、実際に環境問題の解決に貢献できないならば、環境倫理学はそれに内在する約束だと私が考えることを果たしてはいないのである。その約束とは、応用倫理学の他の諸分野が行っていることであって、当該領域に関連する決定・行動・政策・優先順位についての道徳的性質を改善することである。

その約束の重要性は、環境問題のすべてでないにしてもその多くが、様々な仕方で記述されうる道徳的次元をもつという事実を認識しさえすれば理解できる。環境問題についての公共的議論が道徳的次元に注意しないならば、それらは、その生態学的次元を無視する場合と同様に不充分であろう。生態学的次元を無視することは明らかに受け入れられないであろうが、環境倫理学者がより広い環境共同体への関連性を論証するという良い仕事をしない限り、道徳的次元に注意しないことはありうることである。アナロジーに訴えると、もし環境倫理学者が政策あるいは弁護の過程を何も提示できないならば、医師や政策立案者や患者への役に立つ提案が何もないという医療倫理学が辿りえたかもしれない別の歴史と同じようになるであろう。人間の健康の領域が明らかに実質的で緊急で重大な道徳的問題を含むのならば、これらの根本的な問題に従事する確かな能力のない医療倫理学は、ある種の知的失敗あるいは道徳的失敗を示すことであろう。

しかしながら、環境倫理学で最も重要な第一世代の思想家の多くは、この学問領域がその潜在能力に見合ったかたちで行われていないという見解を共有していない。J. ベアード・キャリコット（J. Baird Callicott 1995, 2002）は以下のように論じた。環境倫理学は次の条件を満たすことによって、哲学と環境活動の一分野としてその約束を果たす。それは、環境倫理学が、環境に対する人間の世界観のオールタナティヴを提供するか、あるいは、道徳的な認識あるいは義務を保証するある種の非道具的あるいは内在的な価値をなぜ自然（生態系、種あるいはもっと大きなもの）がもっているかについての理論を洗練させるか、いずれかのプロジェクトに集中しているという条件である。しかし、キャリコットのような人物が、いかにして環境倫理学者が、そのような研究を使って環境活動家組織または公共政策過程に影響を与えてきたかについて事例を指摘できる一方で、環境倫理学に対するこのアプローチは限定されすぎている（Light and de-Shalit 2003 における議論を参照）、あるいは、その結果が環境の弁護者たちの仕事にとっておおよそ取るに足らない、と信じるのに十分な理由がある。というのは、環境倫理学の多くの研究が、自然の人間非中心主義的（nonanthropocentric）で内在的な価値に対する道徳的基礎のような論点をめぐる、プロの環境倫理学者の間で繰り広げられている内輪の論争に携わることをずっと目指しているからである。最近いくつかの重要な前進があったが、伝統的には、環境倫理学の研究文献は、環境資源管理者や政策立案者にとってほとんどがあまり役に立っていない。法律と政策という社会的領域は必然的に、そうした論争において通常は考慮されない人間の関心に訴えざるをえないからである（これは

以下で説明する）[3]。

私は自分の立場を「方法論的環境プラグマティズム（methodological environmental pragmatism)」と呼んでいる。この見解は、私の多元主義的傾向を共有するが、「プラグマティスト」というラベルを受け入れたくない他の環境倫理学者にも開かれている見解だと思う。私がここで行いたいのは、私が展開した形の環境プラグマティズムを手短かに擁護し、特に多元主義的な利点と考えられる点を明確にしてから、その立場が非プラグマティスト（non-pragmatist）でも使用できる道具であることを示しつつ、その発展を見込んで二つの可能な問題を探究することである。

1. 方法論的環境プラグマティズム

環境倫理学における方法論的環境プラグマティズムの位置を理解するために、我々はまず、それが環境倫理学において進行中である諸論争のどこに入るのかを理解しなければならない。それでは環境倫理学とは何か。後に説明するように、環境倫理学とは何か、そして環境倫理学者の願望を理解する仕方はたくさんある。だが私は環境倫理学を次のように理解している。環境倫理学は、非人間的環境（non-human environment）の保護（protection）・保存（preservation）・回復（restoration）のための道徳的根拠を確かめ、明確化し、人間と非人間的自然界との関係をできれば双方の利益のために改善する、といった中心的論点に向けられている、応用倫理学あるいは応用哲学の分野である。

環境倫理学に関して第一に興味深いことは、応用倫理学の他分野、例えば医療倫理学とは違って、環境倫理学は概して、倫理学的「拡張主義（extensionism)」の形で発展してこなかったことである。この意味の拡張主義はまさに、倫理学史の様々な伝統から始まる様々な哲学者たちを意味する。例えば、功利主義、カント的義務論的倫理学、徳倫理学、様々な形態の原理主義、フェミニズム等々が挙げられる。そして拡張主義の哲学者たちは、これらの伝統のどれかの資産を、医療や身体的健康、医師患者関係、または医療制度における他の職業に関わる倫理的問題に適用する。これとは対照的に、環境倫理学は、非人間的な自然的存在者（non-human natural entities）の直接的な道徳的考察に対する、哲学的に特有の新たな基礎を確立しようとする試みとしてむしろ進化してきた。その存在者は、環境論争の中心にあるもの、例えば絶滅危惧種・生態系・他の大規模な環境プロセスなどのことである。道徳的認識のためのこの新しい基礎に対するベースは、このような集合的な自然的存在者が、ある水準の道徳的考慮を保証する何らかの形の本質的、内在的あるいは非道具的な価値をもつという議論に徹底的に基づいている。結果としてこの分野は、功利主義とカント主義者などとの間の論争に支配されてこなかったが、それに気づくのは興味深いことだが、動物福祉（animal welfare）の分野を含めて、我々が通常他の応用倫理学の分野で見るものとは非常に異なる区分の集まりに従って支配されてきた（Light and McKenna 2004 を参照)。

[3] 私はここではこの問題に立ち入るつもりはないのだが、「環境プラグマティズム」の意味を理解する別の仕方がある。それは即ち、ジョン・デューイ、ウィリアム・ジェイムズ（William James)、チャールズ・パース（Charles Peirce）といった典型的な歴史的プラグマティストに源を発する見解を、環境問題に拡張することである。私が他の場所（Light 2004）で論じた理由のために、私はこれが、環境倫理学の分野を再設定するために役立つ道だとは思わない。

これらの区分のうちで最初のかつ最重要なものは「人間中心主義」の拒否に関わる。ティム・ヘイワード（Tim Hayward）は倫理学的人間中心主義を次の見解として定義した。即ちそれは、「他の存在〔もしくは環境〕の関心ではなく、人間の関心に、独占的な考慮あるいは恣意的に優先する考慮」（1997, 51）を与えるような態度や価値や実践を優先する見解である。初期の多くの環境倫理学者は、もし環境倫理学が倫理学の卓越した分野になろうとするならば、環境倫理学は倫理学史における人間中心主義の流行を必ず拒否しなければならない、ということを断固として主張していた。ヘイワードの定義を使うと、このことは、倫理学が人間の責務（obligations）・義務（duties）・権利の提供だけに制限されるべきであって、それによって、非人間や種や生態系の関心と定められうるどんなものよりも道徳の観点からあらゆる人間の関心を優先する、という主張の拒絶に相当する。

この分野でプロの哲学者によって出版された最初の諸論文（例えば、アルネ・ネス（Arne Naess）、ホームズ・ロルストン三世（Holmes Rolston III）、リチャード・ルートリー（Richard Routley（後の Sylvan））、ヴァル・ルートリー（Val Routley（後の Plumwood））、ピーター・シンガー（Peter Singer）による 1970 年代初頭の画期的な諸論文）では、ある形態の人間中心主義が、たとえそのような名前で明示的にラベル付けされていなかったとしても、しばしば標的になった。用語法はどうあれ、人間中心主義的な道徳的見解が環境活動家の検討課題とも環境倫理学の発展とも対立していたという仮定は、どの環境倫理にとっても自然な出発点だとおおよそ想定されていた。この仮定は非常に普及していたので、しばしば十分に弁護されてこなかった。それは、ゲイリー・ヴァルナー（Gary Varner）が「環境倫理学の二つのドグマ（two dogmas of environmental ethics）」（1998, 142）と呼ぶものの一方になった。この立場はいまだに、今日の多くの環境倫理学者によっておおよそ受け入れられている。さらに、人間中心主義が何を意味し、従って、人間中心主義の克服に何が伴うかについての考えはしばしば、この立場について非常に狭く当てにならない定義に依存していた。人間中心主義は、容易にもしくは必然的に自然破壊に導く価値形態と同等であるとみなされていたのである。

当時の環境倫理学者における最初の分裂は、人間中心主義の拒否を環境倫理学の独自の領域を確立するために必要な前提条件として受け入れる人々と、この立場を受け入れない人々との分裂であった。後者は、「より弱い」形（“weaker” forms）の人間中心主義――例えば、自然に対して単なる資源価値ではなく人間に基づく価値を容認する立場――が、環境についての適切な倫理を生み出すのに十分であると論じていた（この論争の初期の記述については例えば Norton 1984 を参照）。環境倫理学が人間中心主義の拒否から始まるべきであったならば、次の段階は、人間非中心主義の観点から非人間の価値の記述あるいは非人間的自然界の記述を提示することであろう。上述のように、この形式の価値の望ましい記述は一般に、何らかの形式の内在的価値として、あるいは少なくとも非道具的価値として、非人間あるいは生態系が、認識を要求するある種の価値をそれ自体で自らの内に所有していることを含意すると考えられてきた。

しかしながら、前に示唆したように、これらの説明の多くで好まれる価値形式は、多元主義というよりはむしろある形式の一元論（monism）であった。環境倫理学における一元論者は一般に、価値づけの単一体系（single scheme of valuation）が我々の様々な義務と責務を環

境倫理に位置づける必要があると論じる（例えば Callicott 1990 を参照）。このことが意味するのは、一つの倫理的枠組みが、完全な環境倫理に含まれる道徳的関心の様々な対象（他人、他の動物、生命体（living organisms）、生態系、種、そして地球自体も）の範囲をカバーしなければならない、ということであろう。このような見解は、これらの対象に対する責務そしてそれらの対象間の責務の衝突をめぐる論争を決着させるためのきれいな方法論を生み出す利点をもつであろう。一方でその見解は、人間非中心主義的環境倫理が、その射程として、直接的な道徳的考慮可能性を人間だけに認める伝統的倫理よりも、道徳的考慮について競合する多くの主張をもっているから、それ自体非常に悩ましい問題ももっている。人間非中心主義的環境倫理に関して、責務の衝突は、人間の間だけではなく、人間と非人間、人間と種、生態系、等々の間にもありうるのである。

多元主義者は、こうした対象範囲をカバーする単一の倫理学理論を我々はもちえないと反論する。その理由は、自然における価値の源泉はあまりにも多様であるから単一の理論で説明されないからであるか、あるいは、我々がそこで人間と自然の両方と多様な倫理的関係を結んでいる多数の文脈が、我々の道徳的責務を果たすために複数のアプローチを要求するからである（例えば Brennan 1998 and 1992 を参照）。従って、アンドリュー・ブレナン（Andrew Brennan）にとっては、「我々の行為を究極的に支配する、ただ一つの価値形式に関する原理の集合は存在しない」（1992, p.6）のである[4]。

人間非中心主義ほどドグマではないが、道徳一元論をめぐる議論は、とりわけ環境倫理学における理論と実践の関係についての論点をめぐって、この分野の進化を後押しし続けている。例えば、多元主義をめぐる論争は、環境の福祉（welfare of the environment）に関する訴えがいかにして特定の状況における道徳哲学の他の論点と折り合うのかという問題を提起する。生態系の価値に対する潜在的な危害についての大部分ではないにしても多くの事例は、独立した人間中心的な道徳的理由のために反対されうる人間共同体に対する道徳的危害の事例でもある。環境正義についての文献、特に、少数民族の共同体がしばしば環境的危害（例えば有毒廃棄物への曝露）の不公平な重荷に耐えているという懸念は、人間の健康と幸福に関する懸念を環境保護に結びつけることに基づいている。真に多元主義的な環境倫理なら、有毒廃棄物集積場による少数民族共同体の利益への危害に対する主張が、集積場によって生態系に対してなされる危害を記述するような同じ価値体系に基づきうるかどうかについて、ひどく気にかけることはないであろう。多元主義的倫理は、集積場と戦うために広く連携する目的で、両立可能な別の言葉で生態系と人間共同体に対する危害を記述しやすいであろう。

この人間非中心主義と一元論への両方の傾向を考察する点で言及されうる今日の環境倫理学には多くの問題がある。しかし私は、これらの問題はおそらく、目下のところ哲学的というよりもむしろ実践的であると思っている。というのも、たとえこの分野で支配的な人間非中心主義的伝統に対する反対者が何人かいるとしても、一層重要なのは、天然資源管理の世界が、他の多くの人間がそうするように、自然の価値評価に対して圧倒的に人間中心主義的で多元主義的なアプローチをとることが広く認められている、という考察だからである。結

[4] このような主張によってキャリコットは多元主義者を道徳相対主義だと非難した。私は Light 2003 でこの懸念に答えた。

局、このことが正しくないならば、なぜ環境活動家たちは人間中心主義にそれほど関心を寄せるのであろうか。以前の多くの環境倫理学者は、そのような人間中心主義的考察から出来する環境保護のための理由を解明することに興味がなかったから、この分野は全体として不幸にも、環境政策をめぐる現実の論争に実質的な影響を与えることができなかったのである。

この文脈において私は、方法論的形式をもつ環境プラグマティズムを展開し始めたのである。この問題に関して私の出発点は、環境倫理学者たちに次のことを想起させることであった。即ち彼らは、哲学共同体の一部であることに加えて、他の共同体つまり環境共同体の一部でもある、ということである。この関係は決して明らかではなかったが、この分野は、環境活動家がはっきりと意図した共同体ではないにしても、少なくとも環境問題に関して進行中の対話の一部であり続けている。よりプラグマティックな環境倫理学を創造する駆動力は、環境問題の解決に積極的に参与する欲求によって動機づけられるだけでなく、いわば環境活動家の共同体の間で我々の哲学的目標を掲げようとする欲求にも動機づけられている。

環境倫理学者はいかにして環境共同体によりよく役立ちうるのだろうか。方法論的プラグマティストにとってその回答は次の認識において始まる。即ち、哲学がより広い共同体で役立ちうるならば、哲学はその共同体の複数の利害が理論家の扱う哲学的問題を決定する手助けができなければならない、という認識である。このことは、私の意味するプラグマティックな哲学者が必ずしも、彼女自身の研究のための問題として所与の共同体が関わる問題をすべて見出す、ということを意味しない。また、顧客の有罪あるいは無罪を調べない雇われ弁護士のように、彼女が問題を分析する前に自分の結論を仮定する、ということも意味しない。それが意味するのはただ、プラグマティックな哲学者の研究の公正な記述は、共同体に対する利害問題を調査して、彼らの共同体の外部にある人々つまり一般大衆に対して、この問題についてその共同体の政策提言を明確化することである。より限定された共同体からより広い公衆に向けてこれらの問題点を明確にすることは、公衆を説得するのによりよい位置にいるという戦略的理由で、公衆の道徳的直観に近い言葉でなされるべきである。これによって要求されるのは「道徳的翻訳」の一形式であり、それによって、環境活動家のより小さい共同体の利害は、より広い公共的な場で表現される様々な道徳的直観に対応する一定範囲の訴えに翻訳されるのである。我々は、この翻訳の仕事を、方法論的にプラグマティックな環境倫理学の「公共的任務」と考えることができる。それは、必然的に多元主義的なプロジェクトであって、環境共同体で考慮される利害を、可能な限り広い道徳的訴えの集まりとして明確化しようとするものである（Light 2003 を参照）。

多元主義的でプラグマティックな環境倫理学は、自然の価値についての論争あるいは一連の論争の単なる記述に（自然の権利に対する主張と同じくらい強い何かについての確実な基礎を正当化した記述にさえも）留まるものではないだろう。公共的な環境倫理にはさらなる問題がある。今日の大抵の環境倫理学者の哲学的研究を支配する自然の価値の人間非中心主義的な記述は、多くの人間の圧倒的な倫理的人間中心主義を考慮に入れる自然に関する彼らの道徳的態度を変えるように大抵の人々を動機づけるのに成功しそうかどうか、という問題である（Kempton et al. 1997 のような研究によって広く論証されている。それが示すのは、環境を保護するための最も強制力のある理由として、多くの人々が人類の将来の世代に対し

て責務を負っているということである)。公共的な環境倫理学はそれ自体、自然の価値に関する弱いあるいは啓蒙された（weak or enlightened）人間中心主義を受け入れなければならないか（例えば、美的理由のためか、あるいは将来の世代に対する我々の責務を果たす一つの仕方として、自然が価値をもっていると論じる)、あるいは、多元主義を支持しなければならないか、いずれかであろう。この多元主義は、一層道徳的に責任のある環境政策に対するより広い公共的支援を達成するのを手助けするために、人間非中心主義的な言葉で常に記述するというよりは、むしろ人間中心的な言葉で自然の価値をときとして記述する可能性を、実際にはその必要性を認めるものである。

しかしながらここでプラグマティズムに訴えるのは方法論的にすぎない。だから、このアプローチは、環境倫理学者が、人間非中心主義的な自然の価値の存在をめぐる多様な哲学的論争や、これらの論争についての彼らの立場を放棄すべきであるとは主張しない。このような研究は、環境倫理学者にとってのより純粋な他の哲学的任務と同様に、続けるべきである。しかし、この方法論に従うことを選ぶ倫理学者は、公共的任務も同様に受け入れなければならない。この公共的任務が要求するのは、彼らが、人間非中心主義的アプローチを通して自然の価値に関する自分たちの見解に到達したときでも、必要なときは、政策立案者と一般大衆（general public）を道徳的に十分に動機づけるような言葉で、自然の価値に関する哲学的見解を道徳的に翻訳することを厭わないことである。

他の研究（Light 2002）において私は、そのような「二つの任務」のアプローチ（“two task” approach）がどのようなものかについてさらに詳細を提示した。私がここで注意したいのは、この戦略は、倫理学者がときとして自分の見解を公衆により響き渡る言語に翻訳するように求めるものだが、それは、環境政策の目的への収束が達成された場合に初めて保証される、ということである。即ち、環境倫理学者の間と同様、様々な陣営の環境活動家の間での見解の優勢が、例えば地球温暖化を引き起こす温室効果ガスの排出を制限する国際的合意を作り上げる必要性のような、同じ目的に収束した場合、哲学者の公共的任務は、その目的を受容するように非環境活動家を最も効果的に動機づける道徳的議論を明確化することである（なぜこのような収束が実際にしばしば起こるのかについての良い説明として Norton 1991 を参照)。経験的には、このことは多くの論点で、弱い人間中心主義的議論を作ることになるであろう。しかし、人間非中心主義的主張も同様により魅力的である場合もあろうと想像もできる。何が最も魅力的かは経験的な問いである。しかしながら収束が達成されなかった場合、この道徳的翻訳の公共的任務は保証されない。それらの状況の下で我々は、環境倫理学者のより伝統的な哲学的任務をもって、我々の形態の環境的「第一哲学」（environmental “first philosophy”）を続けなければならない。この第一哲学は、非人間的自然の倫理的考察のために最も説得力があり擁護可能な道徳的基礎を考え出そうと試みるものである。

このアプローチには補うべき詳細が他にもたくさんある。私は寛大な読者が別の場所で十分な擁護と解明を与えてくれることを信じる。しかし、ごく最近の例を挙げると、英国の福音派（evangelicals）とアメリカの科学者の連携が最近、米国のブッシュ政権に気候変動をより真剣に考慮するように勧める努力を支援するように、米国の福音派の少なくともある種の

方法論的プラグマティズムに従事している何人かの人物を説得し始めたという例がある。第一に彼らは、温室効果ガス規制に関する国際条約の必要性についての諸見解の収束を（そしてもちろんこれらの見解の背後にある科学も）認識していた。第二に彼らはこの収束を行動への保証とみなしていた。第三に彼らはそのような合意のための理由をキリスト教原理主義の言語に翻訳した。最後に彼らは自分たちが標的とする聴衆（アメリカ福音派）にこれらの理由を明確化する説得力のある方法を見出した。この方法は機能した。いまやアメリカ福音派のしっかりした共同体が、地球温暖化に関して何か行うようにブッシュ政権に働きかけ、彼らの個人消費活動も変えている（Eilperin 2007 を参照）。この運動に従事している人々が皆、例えば、キリスト教の神が我々に地球の良き信託者（good stewards）であるように命じたという主張を信じているわけではないし、このことは我々がいかにして地球温暖化の脅威について考えるべきかに対して含意をもつわけでもない。けれども実際、そうした人物は、自分たちの中心的任務が、環境保護のための倫理的理由の道具箱（必然的に、多様な聴衆に訴えることのできる多くの理由という多元主義者の道具箱）を開け、気候変動について包括的合意の目的を、ブッシュ政権がこの問題を真剣に取り上げるように働きかけるのにとりわけ重要だと彼らが信じていた聴衆の道徳的言語に翻訳することだということを分かっていた。この戦術は正しいことが証明された。たとえブッシュ政権が政権末期に京都議定書への批准に同意しなかったとしても、少なくとも人為的な地球温暖化についての科学的合意を認めていた。おそらくもっと重要なのは、共和党が一般に、政府はもはやこの問題を無視できないし、気候変動への懐疑主義にしがみつくことはできないと認めていたことである。我々はいまや少なくとも、これまでよりもこの危機的な問題について一層生産的な論争を米国で前進させる機会を有している。

次に私は、この分野におけるより伝統的な人間非中心主義的出発点から始める人々、特に環境の価値を評価するための単一の道徳的基礎を見つける希望にしがみつく人々によって、この見解の受容を妨げうる二つの論点を取り上げる。

2. 我々は常に我々のほしいものを手に入れることができるのか？

私が取り上げたい第一の論点は「漸進主義（incrementalism）」の問題と呼びうるものである。環境倫理学についての私のプラグマティズムの形態は、哲学的理念を公共政策の問題に適用するに際して「すべてか無か」というアプローチ（“all or nothing” approaches）には従わない。方法論的プラグマティストは、自然についての単一の人間非中心主義的な道徳的価値を十全に受容することが、環境政策の最良の目的を達成するために認められねばならない、ということを主張しない。例えば、この見解においては、人々が人間の自己利害に関わる理由（例えばこの問題に適用される何らかの形態の予防原則）に基づいて絶滅危惧種の保護のためのより強い法律を支持すること、そして、トレードオフが必ずしも種の消滅に導かない限りそれらの目的を達成する見地から我々がこのトレードオフを受容せざるをえない場合もあるということは、全く申し分ないことになる。

さらに声高な人間非中心主義的立場をとる人々は最初はこの立場に賛成しないかもしれない。この分野の創始以来、多くの重要な理論家が次のように論じた。即ち、長期の環境保護

は、自然における特殊な経験を通して一般に達成される、環境意識のより広範囲な変革を通じて初めて達成されるであろう、と論じた。例えば、最初の人間非中心主義的理論の一つ、つまりディープエコロジー（deep ecology）は、崇高な調和（sublime proportions）という改宗経験を必要とするものとして、アメリカの支持者たちによって広まった。

> ディープエコロジーを支持する大抵の人々は、事実上、常にではないにしても通常、彼らが、自分たちの自己・故郷・家族・特殊な属性よりも大きい、個体としての何かとつながっている、という感情をもっていた。この感情はしばしば「大洋性（oceanic）」と呼ばれている。というのも、多く人々がその感情を大洋の上にいるときにもつからである。その一体感がなければ、人々はディープエコロジーに関わり合うように容易に引き付けられることはない（Devall and Session 1985, p.76）。

このような見解によって含意されることは、環境の持続可能性（environmental sustainability）を達成するための必要条件は、非常に多くの人々が、いかにして彼らの世界経験を秩序立て、世界を価値づけるかという点において、ある種の根本的変革を成し遂げることである、というものだ。そのような見解に固執することは、多元主義的でプラグマティックな私の方法論と両立可能であろうか。

明らかに両立可能ではない。しかし、私が明確化しようと試みている見解は単にプラグマティズムの方法論的形式なのであって、プラグマティズムの特定の歴史的学派に固執する見解ではないのだから、おそらく献身的なディープエコロジストでも、公共政策の問題に直面しているときには、彼らの核になる原則にしがみつくと同時に、このプラグマティストの方法論を支持しうるであろう。たとえディープエコロジストが、環境意識の変革によって彼らが望む変化はずっと長い期間がかかると見込んだとしても、彼女は、現行の政治体制あるいは経済体制と両立可能で実行可能な政策上の解決策を準備できると同時に、準備すべきであろう。このことは、プラグマティックな環境倫理学者が、現行の構造に対するオールタナティヴを弁護する任務について、そして資源再配分の論争におけるそうした選択肢の追求について断念する、ということではない。それが意味するのはただ、その立場が要求するのは、少なくとも我々のプラグマティックな意図との整合性のために、我々は、当座において現行の世界観と整合的なよりよい公共政策を提唱するために、我々の望む長期のさらに野心的な目的を明確化する際に、そのような根本的な変化に依存しない、ということである。

いかにして環境倫理学者が、根本的な世界観を変えたいという願望を、達成可能な政策提言を行う必要性と調停させることに取り組めるかについて、一つ提案をさせてほしい。私のアプローチによって示唆されるように、私の見解はこうだ。プラグマティックな哲学は結局、よりよい政策を創り出すための議論に従事しているならば、我々の民主的社会では、公衆の前で、そしておそらく場合によっては政策立案者の前でもその問題を議論する用意がなければならないという見解である。このことは、いかにプラグマティックな議論の創造に対して重要な説得がなされるのかという問題を持ち出す公衆へどのように訴えるべきかについて、重大な問題を提起する。

哲学はすべてある意味で説得に関するものであるが、我々自身を修辞家と区別するために（私はそうだが、我々がそのような区別に関心があるならば)、よい議論と見なされるものに対して多少なりとも合意された（そして改訂可能な）基準がある場合、我々はある形式の議論を通して説得することに留まらなければならない。しかしプラグマティックな哲学者は他の哲学者たちを説得することだけに関心をもっているわけでない。彼女は、直接的に（公衆が次に政策立案者に影響を与えることを見込んで)、あるいは、世論を形成する手助けをする政策立案者に訴えることによって間接的に、公衆を説得することにも関心がある。公共哲学の仕事は、内輪の哲学的議論のためだけではなく、より広い場を目指している。しかし、私が前に示唆したように、このような任務は、何が公衆・政策立案者・あるいはその両方を行動に移させるように動機づけるのかという問いに対して何らかの注意を必要とする。我々の障壁は、抽象的に考えられた妥当性（validity）と健全性（soundness）についての伝統的な哲学的基準よりも高い。というのは、我々が仮定的な哲学的枠組みとは異なる文脈で哲学を政策に向けることになるならば、我々は聴衆が行動するように動機づける議論もしなければならないからである。我々はここで倫理的で政策的な事柄を扱っているのだから、私のようなプラグマティックな哲学者にとっての問いは、我々がプラグマティックな議論を形成する際に道徳的動機づけの問題にどのくらい専心しなければならないかである。

我々は、道徳的動機づけの問題はプラグマティックな哲学には常に重大であるということに同意するならば、再度、ある形式の多元主義を取り入れる用意がなければならない。この多元主義によって我々は、いくつかの形態の枠組みにおいて仮定されうる理論的な一元論に関与せずに、議論に際してある範囲の概念枠組みから選び出すことができる。その理由はこうだ。我々は、聴衆の概念枠組みに訴えるような議論を行う必要がある一方で、上述の気候変動の事例で例証された（と思うが）ように、これらの枠組みが聴衆ごとに異なりうることを認めなくてはならない。

3. 我々は誰のために語っているのか？

この漸進主義の問題は、環境倫理学のプラグマティックで多元主義的な形態に関する第二の論点へ私を導く。この論点を「包含（inclusion)」の問題と呼ぼう。このことによって私は、あらゆる声が何らかの社会的・政治的・文化的な機関において考慮されることを確かめるという一般的問題を意味するのではなく、むしろ我々のプラグマティックな形式の公共哲学が役に立つと想定されている共同体をいかにして我々が定義すべきかという問題を意味するのである。私が先に次のように言ったことを思い出してほしい。即ち、環境倫理学における方法論的プラグマティズムの私の形態に対する保証は、環境に関する公共政策の目的についての、環境共同体における多様な声の中でのある種の合意であって、たとえ彼らがそれらの目的を追求するための理由に関して意見を異にしても、そうなのである。しかしたとえこのような見解に長所があったとしても、それは、「環境共同体」の境界がきちんと定義できないという明白な批判に悩まされる。結局、誰が環境活動家とみなされるのか。

不幸にも、このような問いには、あまり拒絶しにくいようなただ一つの回答があるように思われる。つまり、自分自身を環境活動家と呼ぶ人が環境活動家である、という回答である。

これは表面上満足のいかないものだが、他の選択肢はもっと悪い。環境活動家は、自然界に対する特殊な感知能力をもつ人々だけであると論じることもできよう。しかし明らかに、多元主義者が認めるように、自然界を適正に感知する多くの方法があるだけでなく、その感知能力を表現する多くの方法も存在するのであって、単一の方法では不十分であると思われる。我々が環境に関する感知能力を例えば「精神的なもの（spiritual）」と特徴づけようとするならば、この言葉を我々の人生において有意味だと認めない人々は実際には環境活動家ではない、という主張を我々は進んで支持するであろうか。環境活動家は、環境が彼らの人生において一番か二番に重要な優先順位をもつとランクづける人々だけである、と論じることもできよう。しかし我々はいかにしてそのような優先順位を測るのであろうか。木々が切り倒されないようにするために、ブルドーザーの前で横になったり、何年も林に腰を下ろしていたりすることにコミットしている人々だけが、実際に環境活動家である人たちだ、ということは成り立つのか。これが本当ならば、私は環境活動家ではない、もしくは、私は環境に関する本当の責任をまだ果たしていないことになる。あるいは、ある特定の環境政策あるいは環境政策群に固執することによって、人は環境活動家になるものであると論じることもできよう。しかし確かに政策への固執は意見の不一致の種になりうるし、政策は時間を経るにつれて変化する。そこで、あなたが環境活動家であると言うならあなたは環境活動家であるという回答に人々がしがみつくのももっともであろう。

プラグマティックな哲学者にとって、そのような考察の結果はこうなる。即ち、人々が応答する環境活動家の共同体は、自分たちを自己記述的な環境組織に組織化する人々に、もしくは、彼らの環境主義を何らかの公共的プロセスを通じて知らせる人々に、事実上制限されねばならないであろう、と思われる。さらに主流に近い環境倫理学者は、環境哲学のより公共的な任務に従事するときに、そのような見解を、私の形式の方法論的プラグマティズムを使用する条件として受け入れるであろうか。

ここで我々はまたもやいくつかの問題に突き当たる。例えば、上述の議論から予想できることだが、多数の人間が人間中心主義的見地から思考する世界では長期的な環境的持続可能性は不可能だ、と論じる環境倫理学者もいるであろう。しかし、有益な環境政策は実際、環境政策における信託者倫理（stewardship ethic）への広範な訴えのように、自然的価値という人間中心的概念に基づいてきた、ということを示唆する多くの経験的証拠が現実にある。従って我々は、環境政策を人間中心主義的根拠に専ら基づける功利性に関して用心できる一方で、経験的証拠だけによって、人間中心主義的な議論をことごとく拒絶してしまわないための十分な理由があることが示唆されるし、そしてそれだけによって、ある形式の人間非中心主義的な全体論（holism）を単に産み出すことによっては、我々が一層公共に携わる環境倫理学に決して到達できないと想定するための十分な理由もあることが示唆されるであろう。

結びにかえて

漸進主義の問題と包含の問題を考察した際に、公共に携わる多元主義的でプラグマティックな哲学がいかにして機能しうるか、また、私の方法論的プラグマティズムの問題のいくつかがいかにして解決されうるかを示せたものと思う。私はたしかに、環境問題の道徳的次元

に従事する人々が全てこのプラグマティックなモデルに従わなければならないということを提案するつもりは決してない。私はそれは、ある特定の公共政策のある特定の問題に対して哲学的回答が必要とされる特殊な状況において初めて保証される、と思う。その回答が必要とされる場合、我々が重要な公共的役割をもちうる、さらに広い多元的な共同体を上手に切り分けるために、我々の哲学的実践を変革することを我々は十分に考慮するであろう。

参照文献

Brennan, A. 1988. *Thinking about nature*. Athens, GA: University of Georgia Press.

Brennan, A. 1992. “Moral pluralism and the environment.” *Environmental Values*, 1, 15-33.

Bullard, R. 1990. *Dumping in Dixie*. Boulder, CO: Westview Press.

Callicott, J. B. 1990. “The case against moral pluralism.” *Environmental Ethics*, 12, 99-124.

Callicott, J. B. 1995. “Environmental Philosophy is Environmental Activism: The Most Radical and Effective Kind.” In Marietta and Embree (eds.) *Environmental Philosophy and Environmental Activism*. Lanham, MD: Rowman and Littlefield Publishers, 19-36.

Callicott, J. B. 1997. “Fallacious Fallacies and Nonsolutions: Comment on Kristin Shrader Frechette's ‘Ecological risk assessment and ecosystem Health: Fallacies and Solutions.” *Ecosystem Health* 3: 133-135.

Callicott, J. B. 2002. “The Pragmatic Power and Promise of Theoretical Environmental Ethics.” *Environmental Values* 11: 3-26.

Cronon, W. 1995. “The Trouble with Wilderness.” In *Uncommon Ground: Toward Reinventing Nature*, W. Cronon (ed.). New York: W.W. Norton and Company.

Devall, B. and G. Sessions. 1985. *Deep Ecology: Living as if Nature Mattered*. Salt Lake City: Peregrine Smith Books.

Eilperin, J. 2007. “Warming Draws Evangelicals into Environmentalists Fold.” *The Washington Post* 8 August, A1.

de-Shalit, A. 1995. *Why Posterity Matters*. London: Routledge.

Hayward, T. 1997. “Anthropocentrism: A Misunderstood Problem. *Environmental Values* 6: 49-63.

Kempton, W., J. Boster and J. Hartley. 1997. *Environmental Values in American Culture*. Cambridge, MA: The MIT Press.

Light, A. 1993. “Environmental Pragmatism and Valuation in Nature.” In *Human Ecology: Crossing Boundaries*, ed. Scott Wright. Fort Collins: Society for Human Ecology, pp. 23-30.

Light, A. 2002. “Taking Environmental Ethics Public.” In *Environmental Ethics: What Really Matters? What Really Works?*, eds. D. Schmidtz and E. Willott. Oxford: Oxford University Press, pp. 556-566.

Light, A. 2003. “The Case for a Practical Pluralism.” In *Environmental Ethics: An Anthology*, eds. A. Light and H. Rolston III. Cambridge, MA: Blackwell Publishers, pp. 229-247.

Light, A. 2004. “Methodological Pragmatism, Animal Welfare, and Hunting.” In *Animal Pragmatism*, eds. E. McKenna and A. Light. Bloomington: Indiana University Press, pp. 119-139.

Light, A. and A. de-Shalit. 2003. “Environmental Ethics: Whose Philosophy? Which Practice?” In *Moral and Political Reasoning in Environmental Practice*, eds. A. Light and A. de Shalit. Cambridge, MA: The MIT Press, pp. 1-27.

Light, A. and E. McKenna. 2004. “Pragmatism and the Future of Human-Nonhuman Relationships.” In *Animal Pragmatism*, eds. E. McKenna and A. Light. Bloomington: Indiana University Press, pp. 1-18.

Norton, B. G. 1984. “Environmental Ethics and Weak Anthropocentrism.” *Environmental Ethics* 6: 131-148.

Norton, B. G. 1991. *Toward Unity Among Environmentalists*. Oxford: Oxford University Press.

Varner, G. 1998. *In Nature’s Interests*. Oxford: Oxford University Press.

Weston, A. 1985. “Beyond Intrinsic Value: Pragmatism in Environmental Ethics.” Environmental Ethics 7.